

# 新 おおさか KEYわーど 【第15回】

## 芝居茶屋に蓄えられた大阪文化 「おちょやん」の舞台、道頓堀探訪

連続テレビ小説「おちょやん」の舞台は、道頓堀の街を彩った芝居茶屋である。茶屋といっても現代のカフェではない。芝居見物を盛り上げるソフト満載のサービス業とも言おうか。江戸時代以来つづいた商売で、ご鼠負のために芝居の情報を伝えたり、観劇券を取ったり、棧敷に食事を運んだり、幕間に御茶屋にもどった客に休憩の場を提供するなど、いたれりつくせりのサービスをおこなった。

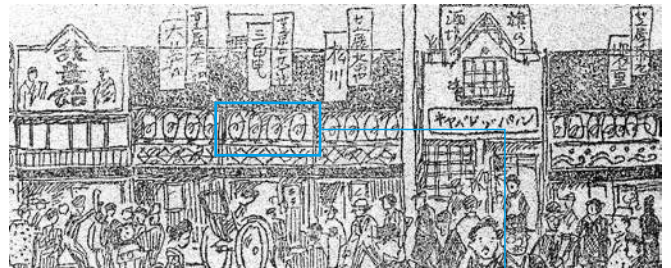
多くは道頓堀川が流れる浜側にあり、大正9(1920)年の雑誌「道頓堀」(道頓堀雑誌社)には、お揃いの提灯を吊り下げた芝居茶屋がならんだ街のイラストが描かれ、同誌の広告には、浪花座の前の大彌、岡嶋、中座の前の大儀、三亀、松川、堺重、近安、角座前の稲照、紙幸ほか全16軒の芝居茶屋が名を連ねる。杉咲花さん演じる竹井千代の奉公した「岡安」の店名は上記の岡嶋、近安などにヒントを得たのだろう。

芝居茶屋は芝居だけではなく、音楽や文学、美術など、大阪の多様な文化芸術ともかかわっている。「おちょやん」に登場した楽器店のモデルは、芝居茶屋「稲竹」が商売替えをして大正5(1916)年に開業した「今井楽器店」であり、作曲家の服部良一(1907~93)の自伝にも登場する。空襲で楽器店は焼け、戦後にうどん店となったのが現在の老舗「道頓堀 今井」である。

また文学では、宗右衛門町で少年時代を過ごした文豪宇野浩二(1891~1961)が、芝居茶屋「紙幸」で女将から聞いた芸妓の話を小説「清二郎 夢見る子」(1903年)で語り、「稲竹」の流れをくむ芝居茶屋「稲照」に生まれた作家三田純市(1923~94)は、著書『道頓堀 川・橋・芝居』(白川書院、1975年)で、大正から戦前の道頓堀での粋なあそびを追憶する。

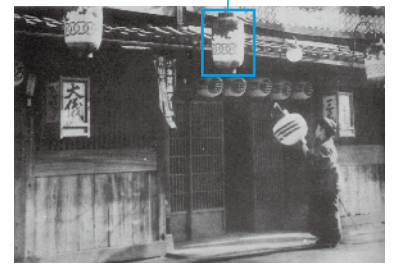
美術関係も多い。郷土研究『上方』道頓堀変遷号(1932年)の座談会では、芝居茶屋「近安」が日本画家・西山完瑛(1834~97)と親しく、完瑛やその父の西山芳園(1804~67)のほか、英一蝶や呉春、中林竹洞らの軸がかけられた座敷は、芝居茶屋でも、あれ程風雅な造りはなかったと絶賛されている。

茶屋の主人には本職の日本画家もいる。「三亀」の大塚春嶺(1861~不明)である。大塚家は一家で画才に恵まれ、長男の大塚正男は第11回文展(1917年)に「雨の



雑誌「道頓堀」のイラスト、「大儀」「三亀」「松川」と一軒おいて「堺重」が並び。提灯は下の写真と同じデザイン。

日の道頓堀》で入選した洋画家であり、次男の大塚克三は舞台美術で活躍して、「上方芸人顕彰」を受けている。



戦前の芝居茶屋、「大儀」と「三亀」。上のイラストにもある店である。

ほかにも浪花座前にあった「大彌」は、芝居茶屋を廃業して中座の東に移り、画廊兼洋画画材店となった。店名も「大彌」をカタカナに変えた「ダイヤ画廊」。昭和6(1931)年の『上方』第12号に同洋画材料店の広告がある。

戦後、芝居茶屋が廃れたのは時代の流れだろう。私も辛うじて中座前に「松川」と「三亀」が残っていたことを記憶するばかりとなった。

そこで、芝居茶屋を模擬体験できるワークショップを企画してはどうですかと、水掛け不動の向かいにある「上方浮世絵館」の高野館長にお勧めしたことがあった。同館が展示する「上方絵」は、江戸時代、名優や芝居の名場面を描いた大坂生まれの錦絵である。観劇客へのサービスという点で芝居茶屋に一脈通じるので、こんな提案をしたのだが、コロナ禍のため実現はまだまだ難しそうである。

※芝居茶屋のなかをコンピューターグラフィックスで体験できる関西大学の「道頓堀 芝居茶屋復元CG」がインターネットで公開されている。  
<https://www.youtube.com/watch?v=0Q4t7j306XM>

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の現像—」(創元社)など。